

氏名・（国籍）	刘 园园（中国）
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	博甲第 3 1 号
学位授与年月日	令和 6 年 3 月 1 3 日
学位授与の要件	学位規程第 2 条第 2 項該当
学 位 論 文 題 目	八十卷本『大方広仏華嚴經』の文献学的研究
論文審査委員	主 査 教授 落合 俊典
	副 査 教授 池 麗梅
	副 査 教授 藤井 教公

論 文 内 容 の 要 旨

宋元時代の刊本大蔵経は、形式的特徴と目録構成という二つの基準に基づいて、「中原開宝蔵系」・「北方系」・「江南大蔵経系」という三つの系統に分類されている。刊本大蔵経に対する研究は、それぞれ大蔵経の雕蔵史、版式、目録、現存状況などを行い、大蔵経研究に基礎的な共通認識を提供している。しかし、刊本大蔵経の中で、それぞれの系統に標準的版式と異なる經典に対する研究は不足である。例えば、『八十華嚴』は、各系統の標準的版式と異なるのは開宝蔵系統の高麗再雕本、北方系統の遼蔵本、江南系統の思溪版である。そして、三大蔵経系統の中で『八十華嚴』に 2 種以上のテキストが存在することは三大系統に共通して見られる。従来の研究では、各系統の中の『八十華嚴』には特殊な現象があり、すでにこの事実が気づかれているが、その特徴上の差異の由来については決定的な結論は出ていない。そこで、本論文では、三大系統の『八十華嚴』で特殊な版式が採用されている底本を考察する。限られた資料から得られた結論は、大蔵経を雕刻する際の底本の選択が単刻本との関連性を持つということである。遼蔵『八十華嚴』は 3 巻の断片のみ現存しているので、資料に限りがあり、具体的にその底本を探討するのが難しい。思溪版『八十華嚴』は、江南地域の龍興寺華嚴結社が刊刻した北宋単刻本を底本として採用している。また、高麗再雕版『八十華嚴』は、守其所蔵の単刻本を底本として採用している。

刊本大蔵経の中で、中原系統の高麗再雕版と江南系統の思溪版は、それぞれ所属する系統の蔵経本を継続せず、代わりに同時代の単刻本を採用している理由については従来の研究では言及していなかった。その一方、高麗再雕版中、数巻の末では、テキストの変更に関する題記が残されているが、先行研究ではその重要性が指摘されなかった。そして、単刻本『八十華嚴』のテキストも同様に 2 種類に分けられるも言及していない。そこで、本論文は、初期の写本のテキストを基準にして、単刻本及び宋元時代の刊本大蔵経を主な資料とし、高麗

再雕版の題記を手がかりに、『八十華嚴』のテキスト伝播の過程での問題と澄観の『華嚴経疏』との関係やその系譜を明確にする。同經典は後世に伝わる過程で、澄観による校訂した部分が經典テキストそのものに加えられたかどうかで、二つの系統に区別される。一つは江南地方の龍興寺の華嚴結社による北宋単刻本、思溪版、高麗再雕版で、いずれも敦煌本や日本古写本と同じく、『八十華嚴』の原形態を忠実に継承している。このため、再雕本や思溪版の底本は従来の大蔵経本に従わず、単刻本を参照している。もう一つは江南地域の紹興府の華嚴会が刻した南宋単刻本、金蔵本、福州版、磧砂版、普寧版で、『華嚴経疏』で澄観が校訂した内容を直接に經典テキストに反映させたものである。宋代以降、単刻本も大蔵経本も澄観の『華嚴経疏』の影響を受ける傾向が一般的になり、その影響は広範囲に及んだと見ることができる。この点はまた、現存するテキストが唐代から宋代にかけての澄観の思想的な影響度の大きさを反映している。

三大系統の『八十華嚴』の他にも、『首楞嚴経』や『楞伽経』など、民間で影響力のある經典も単刻本からの影響を受け、刊本大蔵経の中で特に江南系統大蔵経におけるその底本が変わる現象が見られる。その中で、思溪版『首楞嚴経』も、巻末の刊記からわかるように、龍興寺華嚴結社が雕刻した単刻本を底本にしている。また、東禅寺版『楞伽経』の底本は蘇軾写刻体の金山寺本を採用している。その後の思溪版『楞伽経』は標準版式と異なり、蘇軾写刻体の金山寺本を継承した。刊本大蔵経では、『八十華嚴』、『首楞嚴経』、『楞伽経』のように特殊な例により、大蔵経の形成と単刻本との関係が見られる。これにより、大蔵経雕造する過程では、テキスト選択の時に、仏教寺院の内部事情によるだけでなく、当時の社会で普遍的なものを受け入れ、あるいは影響力のあるテキストを受け取っていたことがわかる。

大蔵経の研究においても重要なトピックの一つは大蔵経目録である。特に刊本大蔵経の中で最も古く、完全な江南系統の蔵経目録についての研究を行い、江南系統大蔵経は後世に対してより深い影響を与えている。江南系統の思溪版以降、大蔵目録が編纂されて広く使用され始め、その後の大蔵経もこの特徴を継承している。思溪版の目録に関する研究については、従来はそのテキスト面での問題に注目しすぎており、目録自体の内容や意義については考えられていなかった。本論文では、江南大蔵経の目録を比較研究し、大蔵経ごとにその特色を研究する。特に思溪版蔵経目録の重要な地位を指摘し、後世に深い影響を与えていることを明らかにする。一方、福州版目録の研究では、すでに学者たちが東禅寺版と開元寺版の両蔵の間に構造的な違いがあることを指摘しているが、これは全面的ではない。本論文では、福州版二蔵のみ収蔵している『大唐貞元新定目録』を中心に、その成立背景を検討すると、東禅寺本と開元寺本を比較し、二蔵の違いを明確する。加えて、『大唐貞元新訂目録』の成立背景を検討すると、『貞元新定釈教目録』にさかのぼることがわかる。この結果により、『貞元録』が江南地域、高麗、日本の地域で流传する過程での差異が明らかになるだけでなく、修正や追加された經典の年代に基づいて、それぞれのテキストの大まかな年代順を判断することができる。従来『貞元録』は現存する中国歴代の刊本大蔵経には収録されておらず、福州二蔵に『大唐貞元新定目録』が収録されていることから、『貞元録』は宋時代の江南地域に伝わっていたはずであると推測できる。

従って、本論文では、『八十華嚴』を中心に、写本、単刻本、刊本大蔵經の三つの資料群を使用し、そのテキストの変化と系譜を検討し、『八十華嚴』と澄観の『華嚴經疏』との関係を明らかにする。また、刊本大蔵經の中で『八十華嚴』などの經典が特殊な版式を採用した底本の来歴を解明し、単刻本と大蔵經本との関係を明確する。加えて、刊本大蔵經の目録の研究において、新たな研究視点を提供する。

論文審査の結果の要旨

博士請求論文「八十卷本『大方広仏華嚴經』の文献学的研究」について、以下、簡潔に審査結果の要旨を述べる。

本論は、『八十華嚴』に関する写本・刊本の諸本を整理統合し、全体的な視点をもって分析した論考である。序論の第二節「本論文の研究目的」において「刊本大蔵經の中で特殊な版式の經典に関する問題、特に『八十華嚴』の底本の来歴、そして底本の置換が発生した原因を明確にし、これにより大蔵經が成立する過程での背景を探求する」と述べる。

第一章から第四章では、『八十華嚴』の敦煌本、日本古写經本等の諸本を検証し、次いで宋代単刻本を取り上げ、これを華嚴結社の刊經活動と併せて詳細に検証し、龍興寺華嚴結社が刊刻した1行15文字の形式を有する北宋単刻本『八十華嚴』を底本として採用したことを明らかにした。

さらに第三章と第四章で、刊本大蔵經の中で、中原系統の高麗再雕版と江南系統の思溪版は、それぞれ所属する系統の蔵經本を継続せず、代わりに同時代の単刻本を採用している理由については従来の研究では言及がなく、その一方、高麗再雕版中、テキストの変更に関する題記が残されているが、先行研究ではその重要性が指摘されなかったと述べる。そして、単刻本『八十華嚴』のテキストも同様に2種類に分けられている点を指摘した。

初期の写本のテキストを基準にして、単刻本及び宋元時代の刊本大蔵經を主な資料とし、高麗再雕版の題記を手がかりに、『八十華嚴』のテキスト伝播の過程での問題と澄観の『華嚴經疏』との関係やその系譜を明確にしようと試みている。『八十華嚴』は、後世に伝わる過程で、澄観による校訂した部分が經典テキストそのものに加えられたか否かで、二つの系統に区別される。一つは江南地方の龍興寺の華嚴結社による北宋単刻本、思溪版、高麗再雕版で、いずれも敦煌本や日本古写本と同じく、『八十華嚴』の原形態を忠実に継承している。このため、再雕本や思溪版の底本は従来の大蔵經本に従わず、単刻本を参照している。もう一つは江南地域の紹興府の華嚴会が刻した南宋単刻本、金藏本、福州版、磧砂版、普寧版で、『華嚴經疏』で澄観が校訂した内容を直接に經典テキストに反映させたものである。宋代以降、単刻本も大蔵經本も澄観の『華嚴經疏』の影響を受ける傾向が一般的になり、その影響は広範囲に及んだと見ることができる。この点はまた、現存するテキストが唐代から宋代にかけての澄観の思想的な影響度の大きさを反映している。

第五章では、上記の方法を活用して、研究対象を『八十華嚴』から『楞伽經』まで広げ、

単刻本が刊本大蔵經に影響を与えたことを具体的に論証している。

第六章では、さらに研究対象を拡大させて、思溪版の特徴を目録や福州版との関係性から明らかにしている。また福州版の『大唐貞元新定目録』を取り上げ、高麗蔵や日本古写經との比較から考証し、この方面での新しい取り組みを行っている。

以上本論文は、『八十華嚴』のテキストについて8世紀から13世紀における諸本の系譜を明らかにしている。特に高麗再雕本の守其等の校勘記のなかで最も重要な記述を見だし、難解な文章を解説して大蔵經における『八十華嚴』系譜解明への端緒を開いた。この論証は本論文に画竜点睛を与える画期的な考察であり、評価できるものである。

令和6年3月4日午後1時から2時10分にわたり、以上の提出論文について口述試問が厳正に実施された。口述内容は多岐にわたったが、その主要な点を指摘しておきたい。

まず、『八十華嚴』の敦煌本や日本古写經については、諸目録を概観し書誌情報を再録するだけであり、具体的に比較対照して諸相を考察していないことが指摘された。それに対して思溪版『八十華嚴』の解明の中、高麗再雕本の守其等の校勘記の記述から研究対象が拡大したため、古写本の研究が進まなかったのが今後の課題としたいと返答があった。

また、高麗再雕本の校勘記の読解は評価できるが、さらに一部未解明と思われる箇所があるのでさらに検討を加えて欲しいとの評論に対しては、今後本研究を継続して進め、文献の記録を丁寧に読解していこうと考えていると応答があった。

口述試問終了後、主査・副査の合議の結果「思溪版の一つの謎である1行15文字經典の中、『八十華嚴』は龍興寺華嚴結社が刊刻した単刻本に基づいていることを実証した優れた論文である。」として「8世紀から13世紀に及ぶ『八十華嚴』の系譜の解明を通して大蔵經への系譜論まで及んだことは興味深いことであり、さらに研究を推進していくことが望まれる。」と高く評価された。その結果、本提出論文を課程博士論文として認定することを主査・副査全会一致で承認した。

よって本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当すると認定するものである。